

「ケレザ・ママ」とは、キルギス共和国からの留学生ケレザさんのお母さん・アジルブブさんのことである。本稿ではケレザ・ママと書かせていただく。可愛い末娘が異国の地、日本でどのような日々を送っているのか心配で、様子を見に本年(2013年)3月に来日された。

後述するように我々に深い印象を残したケレザ・ママは、6月12日(水)夕方5時小雨模様の中、キルギスの首都「ビシュケク」に向けて成田空港から飛び立った。現在成田からの直行便は運航しておらず、大韓航空で仁川空港に行き、そこでウズベキスタン航空に乗り換えウズベキスタンの首都タシケントへ。そこで更にビシュケク行き

の便に乗り換えなければならない。私と柚野さんとお見送りに行ったのであるが、帰りの車中でケレザさんに「ママが無事到着されたら一報ください」とお願いした。大丈夫とは思っても一人で帰国されるのだし、少なくとも大韓航空のキャビンアテンダントには母国語もロシア語も通じないであろうし、しかも他国の飛行機に2回も乗り換えるのだから心配しない方がおかしい。

実はもうひとつ心配事があった。私の車のトランクには米俵に似た黒い布製の旅行鞆の他に手荷物用の大き目なバッグが3つくらいあった。布製の旅行鞆にされたのは大韓航空の荷物の重量規制のためで、すこしでも軽くするためである。20キロを超える場合は超過分はすべて有料なのだが、カウンターで計るとかなり超過していて別途4万円くらいかかるというのである。なにしろ3か月滞在されたのでお土産の山であるという。

カウンターの職員に何とかならないかと交渉したが埒が明かない。職員は日本郵便の受付に行き急がない物は郵便にすれば2万円くらいで済むのでは、とアドバイスしてくれる。ともかくそこに行って荷物を整理しなおすことになった。重い本などはケレザさんが

持ち帰ることにしたり、日本郵便の方の親切な対応で段ボールに整理して入れなおしたりして何とか2万円を切るくらいになった。ただ郵便は2週間あまりかかると言われ、またキルギスとはEMSはないので何かあった時の追跡調査は困難といわれた。果たして無事届くのか心配になった。神様がケレザママと小包を守ってくれると信じるほかはない。

翌日の6月13日は「わんりい」の定例会があり私も出席した。午後3時ころ私の携帯が鳴った。すぐ開くとケレザさんから、「今日の午後無事について、今親戚の人と家でにぎやかにやっています。」とのことであった。「わんりい」の田井さんをはじめ出席していた皆さんから安

堵の声が上がった。皆それぞれ心配されていたようである。帰国に要した時間は約20時間である。地図を見てもキルギスは遠い遠い国で、これまで気にも留めなかった国である。しかしケレザさんとケレザ・ママのおかげで一気に身近な国となった。

3月21日にケレザさんを囲むキルギス料理の会があった。私は、この日は用事があり欠席したが、「若しかしたらママも参加するかも」とケレザさんが言っていた。実際にケレザ・ママが日本に来たのはその2、3日後で、「わんりい」の皆さんも含めて私がはじめてケレザ・ママと会ったのは4月5日の、わんりいメンバー達とのこどもの国でのお花見の会であった。

今年の冬は雪も何度か降り寒かったのであるが、桜の開花はとても早く町田市は3月26日ころ満開となった。したがって、花見の会は散り始めた桜の花の下で始まった。当日は晴天となり全員で12名の会はにぎやかで、各人が持ち寄った料理はカラフルでシートの上で美を競った。時折風が通り抜け、その都度頭上に料理に花びらが振りかかった。ケレザ・ママは笑みを絶やさず、言葉は通じないが皆にいろいろと話し



薬師池公園の藤の花をめぐるケレザ・ママ

かけられていた。言葉は分からなくとも身振り手振りもあって何となく通じ合えるものである。すぐに12人の輪に溶け込んでいかれた。朝作られたというキルギス風スナックを持参され、私達もおいしくいただいた。たのしいおだやかな春の一日であった。

それから一週間後、田井さんから「あなたの家の前の八重桜が満開だから、ケレザさんとケレザ・ママを今から連れて行くので、11時ころ桜通りに出てきてくれますか？」と連絡があった。染井吉野はほぼ散っていたが八重桜はちょうど満開で、家の前に出ると3人が私に向かって手を振っていた。朝は快晴だったにも拘らず、三輪緑山(町田市)に着いた頃から時折にわか雨がぱらついたが、八重桜の並木道を4人でゆっくりと散策した。ケレザ・ママは楽しそうに話しかけられた。日本語をすこしずつケレザさんから習っているようで、片言の日本語が話せるまでになられていた。

その後3回ほど三輪コミュニティセンターで、'わんりい'の皆さん達とケレザ・ママを囲んで一緒に日

本料理やキルギス料理を作って交流した。一回目は5月の連休中でケレザさんが一緒に参加されたが、その後はケレザ・ママが一人だった。十分な会話はできなくとも、ケレザ・ママはいつも心から楽しんでいる風な満面の笑顔で、私達も大いに楽しんだ。

ケレザさんは勉強が忙しく、ママは一日中家で留守番していることが多いと聞いたので、'わんりい'会員の杉野さんと相談して、日本の喫茶店を見せてあげてそこで簡単な日本語教室を開こうということになり、鶴川にあるコメダ珈琲店にご案内した。飲み物を注文するとママは手提げから大学ノートを取り出した。我々はケレザさんをお願いして作っていただいたキルギス語と日本語の比較表をもとに勉強を始めた。たとえばこんな具合である。凶鑑にある花を指さして「ばら」とか「ばたん」を指さして日本語の発音をする。ママは発音した後、大学ノートにキルギス語でその発音を書き留める。挨拶語はお互いに教えあう。「こんにちは」は「カンダイスズ」、「ありがとう」は「ラフマツト」とこちらでも少しキルギス語を覚えることができた。

後日またそのノートを見させていただくとバラやばたんの花の絵を書いてそのわきにキルギス語で花の名前が書いてある。その絵はとても上手に描かれ、流れるような筆記体の文字は美しかった。とにかく日本語を習得しようとする意欲にはいつも感心させられた。日本語教室はやはり'わんりい'会員で、私と同じ三輪緑山の日高さん宅でも2~3度行った。波長が合うのか、ケレザ・ママと日高さんとは言葉が通じ合っているように私には思えた。

ここでキルギス共和国を知らない方のために、どのような国なのか紹介したい。偉そうなことを言っても私もつい最近まで何も知らなかったのであるが・・・。

以前はソ連邦の一共和国であったが、1991年民主主義国家として独立した。面積は20万km²なので日本(37万8千km²)の半分より少し広い。国土の40%が標高3千メートルを超える山国という。中央アジアのスイスとも言われるそうだ。中国との国境はあの天山山脈である。ケレザママが住むビシュケクは標高8百メートル、緯度は北緯43度とほぼ札幌市と同じだ。国花は、「エーデルワイス」と「チューリップ」だそうだ。通貨単位は「ソム」。

これから先は、ケレザさんから聞いたことであるがキルギス人の赤ちゃんも蒙古斑があるというのである。この一言で随分親近感が湧き出る。もう一つ日本



ケレザさん(左)とケレザママ(右) 'わんりい'のメンバー達と一緒に作った、草団子、精進揚げ、たけのこご飯を前に。於：三輪コミュニティセンター



キルギスのお菓子・トモモを'わんりい'メンバー達と一緒に作る 於：三輪緑やマコミュニティセンター

と同じなのは、女性は結婚したら姓が変わることだ。顔も日本人と殆ど変わらないのでこの地方は日本人のルーツの一つかもしれない。それからもう一つ。実はケレザさんはお父さんの顔を知らない。4人兄妹であるが、末っ子のケレザさん(上の3人は皆お兄さん)がまだお腹の中にいる時、水難事故で亡くなったそう。それからのケレザママの苦労は想像に難くない。

4人の子供を抱えて周囲は再婚を勧めたらしいが、ママは一人で4人の子供を育てる決意をされた。再婚して万が一その男性が子供たちにつらく当たったりすることもありうると思うと、どんなに大変でも自分一人で育てようということだったようだ。この様な状況下、キルギスでは素晴らしい習慣があるのである。伴侶を亡くしたお母さんには子供たちは「お母さん再婚してください」と言わなければならないそうだ。勿論生活が苦しいからお金持ちの男性と再婚してください、という意味ではなく母には母の人生があり私達子供の犠牲になる必要はない、という意味が含まれているという。

ケレザさんからこの話を聞いたとき、彼女と次のような会話を交わした。——「あなたもそのように言ったの?」「はい、言いました。」「その時お母さんは何て答えたの?」「お母さんはただ微笑んでありがとうと言いました。」「お兄さんたちも言ったの?」「もちろんです。」「——私はキルギスという国は何と心の温かな国だろう、と私までほのぼのとした気持ちになったのを覚えている。ケレザママと接すると伝わってくるものがある。それは子供への深い愛、誰に対してもやさしい気持ちで接する心と言えようか。一方で芯の強さも伝わって来るのである。閑話休題。

ママは花がとても好きである。田井さんはちょうど見ごろであった薬師池公園の藤の花や近くのポタリ園と菜の花畑、そして神代植物公園にも連れて行かれた。神代植物公園ではバラの花が満開でママを大いに満足させたようだ。バラの匂いを何度も嗅いだり、大輪の花の前で記念写真を撮ったり、また公園の奥にある温室では熱帯性の珍しい花々をじっと眺めて驚いた表情を見せた。大学ノートには日本で見た花がたくさん描かれていたが、そのうちノートは花で埋め尽くされてしまうに違いない。

さて、5月も終わりに近づきママの帰国の日が迫っ



江ノ島の海で無邪気にはしゃぐケレザ・ママ

てきた。帰国の日までもう一つ思い出を残させてあげたいと思いいろいろ考えた。ふとキルギスには海がないので江の島の海岸がいいのではと考え、日高さんと相談し5月29日に3人で江の島に向かった。天気予報は小雨であったが、気持ちが天に通じたのか時折薄日が差した。町営の駐車場に車を入れ、江の島にかかる大橋に向かってそぞろ歩く。大橋のたもとから砂浜に下りるときからママは心持興奮気味でさっそくサンダルを脱ぎ、海辺に向かって行った。

私と日高さんは海際からすこし離れたところに立って様子を見守っていた。ママは嬉々として水と戯れ、ズボンの裾はあげていたが、それが濡れるのもかまわず本当に嬉しそうであった。また貝殻を拾い集め大事そうに袋に入れていた。キルギスに持って帰るとのこと。ヤドカリを見つけ中から出てくるものを不思議そうに眺めたり……。子供に帰ったようであった。こんなに喜んでもらってお連れした甲斐があったというものである。そのあと鎌倉大仏にお連れした。11.3メートルの大仏様にはびっくりされていたが、大仏様はケレザママに微笑んでいたような気がした。楽しい時間と楽しい日々は瞬間に過ぎ去るものである。そして帰国予定日の6月12日がやってきたのだ。

思い出は尽きないがこのあたりで筆を置こうと思う。ともかくケレザママの印象は、美しい国キルギスと共にケレザ・ママと関わった‘わりい’の皆さんの心の中に強く残ったのではなかろうか。そして言葉はさほど通じなくとも気持ちは通じ合うものだということ改めて実感させていただいた。いつまでもお元気で、またいつの日か再会する日が遠からんことを願うものである。